

VI 黒曜石原産地の鉱山化について

星ヶ塔の黒曜石の、とくに良質なものを、山越えてここまで出し、交易のために、まず、秘密に貯蔵したのである。だれが？ たぶん、この近くの前期末から中期初頭の村の人、指名するなら、踊場村、穴場村、唐沢村など、いまもう滅び去った村が浮かぶ。地点からいって、いちばん近いのが唐沢村、土器から時間的に考えると、踊場村である。

黒曜石は流れていった。

いろいろなものが、その道をつたって、またかえってきた。塩・貝・乾物をはじめ、いろいろなめずらしい土器などである。

オブシディアン・ラッシュ
黒曜石狂時代がおこりつつあった。(藤森栄一『古道』)

(1) 黒曜石原産地の鉱山化とオブシディアン・ラッシュ

藤森栄一氏は、洞窟の中から、トラック一台ほどの黒曜石と、諸磯c式土器とが発見された、諏訪市の「神籠石」を、「交易」のための「秘密」の「貯蔵」場所と呼び、周辺にある「諸磯c式土器」と同じ頃の遺跡の住人をその貯蔵をした人々と考えた。そして、大量の黒曜石が「交易」するさまを、ゴールドラッシュになぞらえ「オブシディアン・ラッシュ」と呼んだのである。

本書で報告したとおり、東俣遺跡、星ヶ塔遺跡の調査では、縄文時代前期末葉に黒曜石の採掘が行われていたことが明らかになった。それは、藤森氏のいう「オブシディアン・ラッシュ」のはじまりと同じ時期である。とすると、「オブシディアン・ラッシュ」は、黒曜石の採掘すなわち黒曜石原産地の「鉱山化」と深くかかわっていると考えることができそうである。

ここで目を中部高地の周辺に向けてみよう。縄文時代前期末葉では、北陸、新潟、北関東などで霧ヶ峰産の黒曜石が量的にまとまって出土する傾向がうかがえる。星ヶ塔遺跡で出土した諸磯c式土器と類似した土器が出土している、群馬県糸井宮前遺跡では、6 kg以上にのぼる多量の黒曜石が出土しており、産地推定分析では、ほとんどが星ヶ塔産と推定されている(鈴木ほか1986)。大工原豊氏によれば、群馬県内では、諸磯b式期以降黒曜石が激増するが、諸磯b式中段階までは和田峠産の黒曜石が卓越し、諸磯b式新段階から諸磯c式期にかけては星ヶ塔産の黒曜石が卓越する傾向があるという(大工原1998)。

新潟県では、黒曜石の利用が顕著な、角田山麓の縄文時代遺跡群で黒曜石の産地推定分析が行われ、遺跡群の黒曜石利用の時期別変遷が明らかにされている(金山ほか1995)。それによれば、前期末葉から中期前葉中段階に黒曜石が高い頻度で利用され、高利用多出遺跡、高利用寡出遺跡、低利用寡出遺跡の3類型に分けられるという。利用されている黒曜石は、星ヶ塔産のものが卓越している。また、角田山麓の「対岸の佐渡島の同時期遺跡でも信州産黒曜石の利用が顕著にみられるが、至近距離に位置する当地A類型(高利用多出遺跡…宮坂)の集団がその供給に関与したことも推定される」と述べられている。その後の中期前葉新段階では黒曜石の利用率は低下し、さらに後晩期になると利用率は「かなり低下する」という傾向がとらえられている。

北陸地方の黒曜石の石器については、平口哲夫氏がまとめているが、それによれば、石川県では真脇

遺跡、三井新保遺跡、徳前C遺跡で、前期後葉から中期前半に属する黒曜石製の石器が出土し、いずれも霧ヶ峰産と推定されている。平口氏は、「石川県内では縄文時代を通じて黒曜石製遺物の出現率は低いけれども、中期中葉～後葉の時期に微増し後期から晩期にかけての時期には前期後葉から中期前葉の水準よりもさらに低下したといえそうである」と述べている（平口1996）。ということは、後期から晩期よりも前期後葉から中期前葉のほうが出現率が高いということであり、産地推定分析の結果を加えると、搬入ピークの中期中葉から後葉よりも少ないが、前期後葉から中期前葉に、霧ヶ峰産の黒曜石がある程度まとまった数量、北陸に搬入されているといえそうである。

こうした、中部高地の周辺地域の状況を見ると、全般的に前期末葉に霧ヶ峰産の黒曜石の搬入が増加するという傾向が指摘できる。これは、前期末葉にはじまった「オブシディアン・ラッシュ」が本州中部地方におこった出来事であったことを示しているのではなかろうか。

このような、本州中部地方における黒曜石の増加現象は、黒曜石の安定的な供給を背景にしていると考えられる。その供給を支えたのが、「採掘」による安定的な数量の確保であったと考えたい。したがって、「オブシディアン・ラッシュ」は、黒曜石原産地の「鉱山化」と一体化した現象であったといえることができるであろう。

しかし、黒曜石が安定的に確保できるといっても、それを流通させる何らかの「仕組み」がなければ多量の黒曜石を広域的に運ぶことは不可能であろう。したがって、前期末には広域に物資を流通させるような、広域的な社会の仕組みが確立していたと考えたい。そうした社会の仕組みと黒曜石採掘の相関が、黒曜石の広域流通を可能にしたのではないだろうか。とすると、黒曜石原産地の「鉱山化」は、社会の仕組みと深く関係すると考えられる。

（２） オブシディアン・ラッシュと硬玉製品の出現

広域的な物資の流通ということでは、前期末葉の集落である、下諏訪町武居林遺跡の硬玉原石や石斧（いわゆる玉斧と呼ばれるもの）が注目されよう（下諏訪町教育委員会1979）。武居林遺跡は黒曜石原産地と諏訪盆地をつなぐ砥川の流域にあり、諏訪盆地では黒曜石原産地に一番近い前期末葉の集落である。その立地条件からすれば、黒曜石の採掘者のムラである可能性が高い。武居林遺跡と沢を挟んで隣接する、前期末葉から中期初頭の土坑が集中して検出された一の釜遺跡は、武居林遺跡と相互に関係をもつ遺跡と考えているが、その一の釜遺跡では黒曜石の貯蔵ピットが検出されている。そうした諸要素からすると、武居林遺跡を採掘者のムラと考えることもあながち無理なことではないかもしれない。このあたりについては、今後詳細に検討をしてゆきたいが、いずれにせよ、黒曜石原産地と密接に関わっていると考えられるムラで、硬玉の原石や石斧が出土しているということは注目できよう。

長崎元廣氏によれば、硬玉などを素材とするいわゆる玉斧は、縄文時代前期末葉に出現し、その後中期に盛行、後晩期にかけても東日本の広い範囲に分布するという（長崎1984）。武居林遺跡の硬玉製の玉斧は、まさに出現期のものに位置づけられよう。

また、安藤文一氏は、新潟県糸魚川市付近の硬玉原産地周辺地域では、硬玉製品の生産は前期中葉に遡ることはなく、前期末葉から中期初頭に出現すると推測している（安藤1995）。

硬玉製品の出現を前期末葉から中期初頭であるとする、それは「オブシディアン・ラッシュ」のはじまりと同時期ということになる。安藤氏によれば、硬玉原産地周辺の前期中葉以前の遺跡では、硬玉

の小礫すら出土しないという（安藤前掲）。とすると、和田峠や霧ヶ峰における黒曜石原産地の「鉱山化」と、硬玉原産地の開発とは時を同じくしているということになるのであろうか。

本州中部地方におこった、広域流通物資をめぐるこの二つの出来事は、おそらく、相互に関連する出来事であり、黒曜石や硬玉といった広域流通物資を動かす、広域的な社会の仕組みの確立を背景におこった出来事であろう。そして、その関連の交点のひとつが武居林遺跡であると考えられる。

東俣遺跡、星ヶ塔遺跡の鉱山化は、その場所で局地的に起こった出来事ではなく、当時の社会の大きな動きの中で起こった出来事と考えるべきであろう。ここでは硬玉に注目したが、それ以外にも、たとえば、打製石斧の増加もこの時期の変化の一つにあげられる。今後あらゆる事象に目配りし、黒曜石原産地の鉱山化を体系的に考えていかねばならない。

（３） 中期への胎動

黒曜石原産地の鉱山化、「オブシディアン・ラッシュ」、硬玉製品の出現が相互に関連する出来事であることを以上に述べてきた。そしてその背景に、広域的な物資の流通を可能にした、社会の仕組みを想定した。では、その社会の仕組みとは何であるのか。いまここでそれに答える用意はないが、林謙作氏のつぎの指摘が、大きなヒントをあたえてくれるものと思う。

「縄文人は〈ハードウェア〉である労働要具そのものを発達させる代りに、〈ソフトウェア〉を発達させ、生産の水準を維持し、向上させたのである。〈ソフトウェア〉にあたるのは、呪物や呪術そのものではなく、彼らの作り上げた村落の組織、地域間の結び付き、そしてそこで展開される労働の組織である（呪物や呪術は〈ソフトウェア〉を運用する方法の主観的な表現とその媒介物である）」（林1986）。

林氏の言葉を借りれば、ここで述べてきた広域的な社会の仕組みとは、「地域間の結び付き」という言葉に置き換えられようか。とすると「地域間の結び付き」の発達が黒曜石や硬玉を流通させる原動力となったということができる。黒曜石の場合では、流通を安定的に行うために、複数の場所で採掘が行われているが、採掘・排土処理・原石の選別・粗割り・原石の搬出など、複数の工程を踏む一連の作業を効率的に行うためには、労働組織の発達が欠かせない。そうした労働組織の編成や地域間の結び付きを維持するのが、村落の組織であったと思われる。

本州中部地方の縄文時代前期末葉は、このような組織、すなわち人間相互における働きかけが発達した時期であり、それはまさに中期への胎動であったということができるのではないだろうか。そのような中期への発展を内在させた組織の発達が、新たな自然への働きかけである、黒曜石原産地の鉱山化を可能にしたのである。逆にいえば、前期末葉の黒曜石原産地の鉱山化は、中期の発展の前提となった一つの現象であるということができよう。あるいは、黒曜石原産地の鉱山化や、硬玉製品の出現、打製石斧の増加など、人々の、自然に対する新たな働きかけと、人間相互における働きかけの発達、といった構造的な変動をもって、縄文時代中期の社会構成の成立とすることも意味のあることかもしれない。